

j-milk リポート

vol-19
2016. WINTER

特集1 ■ 乳の学術連合の窓

現代日本の栄養問題と乳の可能性
～若い女性と高齢者の「低栄養」への対応～

清水 誠 氏 東京農業大学教授、東京大学名誉教授

特集2 ■ 酪農乳業の“みらい”を考える視点を提供

～平成27年度「酪農乳業みらいセミナー」の講演から～

特集3 ■ 「第3回牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール」表彰式を開催

～10,529作品から入賞作品を選考～



C CONTENTS

- 03 **特集1** 乳の学術連合の窓
現代日本の栄養問題と乳の可能性
～若い女性と高齢者の「低栄養」への対応～
清水 誠 氏 東京農業大学教授、東京大学名誉教授
- 05 **特集2**
酪農乳業の“みらい”を考える視点を提供
～平成27年度「酪農乳業みらいセミナー」の講演から～
- 08
「TPP 大筋合意」による酪農乳業対策の考え方
～Jミルク見解～
- 09
「今後の生乳取引のあり方について」の検討と報告
- 10 **特集3**
「第3回牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール」表彰式を開催
～10,529作品から入賞作品を選考～
- 12
国際的な動向から日本の次世代酪農の姿を探る
～「酪農乳業の国際比較研究会」で研究者と酪農家が意見交換～
- 14
酪農乳業食育推進研修会
～知識の提供から、感覚・感動の教育へ 体験を通じて食の価値を見直す『味わい教育』の可能性～
- 15
海外の酪農の実情を現地で体感
～第40回酪農海外現地実務研修会に参加～
- 16
栄養指導実践セミナーを開催 ～地域の実情に即したテーマで指導法を学ぶ～
超高齢化社会に向けての食事と運動法 ～40代からのカラダの守り方～
- 17
乳和食で健康な生活を ～小山浩子氏が国会議員の会議にて講演～
牛乳食育研修会を開催 ～学校教職員対象に食育研修会を全国5会場で実施～
- 18
Jミルクの活動日誌・第14回全日本ホルスタイン共進会が開催
- 19
今後のスケジュール・スタッフ紹介・編集後記・細野ひろみ氏訃報



特集1

現代日本の栄養問題と 乳の可能性

～若い女性と高齢者の「低栄養」への対応～

清水 誠氏 東京農業大学教授、東京大学名誉教授

日本人が抱える栄養問題として、近年深刻化が指摘されるのが、若い女性と高齢者の低栄養だ。特にたんぱく質の不足が顕著とされ、胎児の健全な発育や健康寿命の延伸といった点から対策が求められている。清水誠氏(乳の学術連合・牛乳乳製品健康科学会議幹事)に、低栄養の問題点と、その改善に向けて乳が果たする役割について聞いた。

女性の「痩せ」が生む新たな健康問題

— 現代の日本人の栄養問題で、特に注意すべきはどのような点でしょうか。

清水：日本を含む先進各国で問題になっているのが、栄養過多の人々と栄養不足の人々が同時に存在する現象です。日本の場合、低栄養に対して特に注意が必要なグループは、若い女性と高齢者です。

女性の栄養不足による痩せすぎは、本人だけでなく将来出産した際の子どもの健康にも関わってきます。2009年には低出生体重児(2500g未満)が約10%に上りましたが、これは痩せすぎの女性の増加も原因と考えられています。低体重で生まれた子どもは将来、メタボなどの生活習慣病になるリスクの高いことが研究で明らかになっているので、現代女性の栄養問題が、将来の日本人の健康に影響を与える可能性があります。

また高齢者の低栄養は、筋肉量の減少や運動機能の低下によって要介護状態につながるため、健康寿命の延伸を目指す上での課題になっています。

— 日本人に必要な栄養素の中でも、特にたんぱく質が重要とされています。

清水：「プロテイン」の語源がギリシャ語の「プロティオス(第一のもの)」であることからわかるように、たんぱく質は私たちにとって最も重要な栄養素のひとつです。古くから生命維持に不可欠な物質と認識されてきましたが、近年の研究で体内の各部位の機能を維持するために必要だとわかってきました。現在の1日の摂取目安は体重1kg当たり1gですが、スポーツをしていて筋肉を強くしたい人はより多く摂るなど、自分の健康状態に合わせて十分な量を摂ることが大事です。

アミノ酸組成に優れた乳たんぱく質

— 牛乳のたんぱく質にはどのような特徴があるのでしょうか。

清水：たんぱく質の見方として代表的な観点は、アミノ酸組成と消化性です。食品から摂取されたたんぱく質は、体内で消化、分解され、アミノ酸として吸収されます。

私たちはこのアミノ酸を部品として、骨や筋肉、臓器、血液などを構成するたんぱく質を再合成します。したがって、人間の体をつくるために必要で、なおかつ体内ではつくりえない必須アミノ酸の含有量とバランスが、たんぱく質の「質」を判断する尺度になるのです。その点では、一般に植物性より動物性たんぱく質のほうが人間には適していると言えます。これは当然のことで、動物性たんぱく質には本来動物が必要とするアミノ酸が入っているからです。

中でもミルクのたんぱく質は、子どもを育てるために必要なアミノ酸組成になっているから、当然よいのです。具体的には、筋肉の合成などを促進する3種類の必須アミノ酸「BCAA」が豊富で、中でも重要なロイシンの含有量が多いことが特徴です。

牛乳の栄養という点では、たんぱく質と同等に重要な要素として、カルシウムの豊富さも挙げられます。牛乳を2、3本飲めばカルシウムの1日の必要量を満たすことができます。日本の若い女性と高齢者の低栄養の改善にも、質のよいたんぱく質と豊富なカルシウムの両面で、牛乳は大きく貢献できると思います。

— 栄養が評価される一方で、牛乳の脂質に対しては否定的な捉え方もあります。

清水：牛乳の脂質が否定的に捉えられる理由のひとつはコレステロールですが、この点はもはやネガティブファクターではなくなっています。食事から摂るコレステロールと血中コレステロールの間に、明確な関連を示す証拠がないため、日本では2015年4月改訂の「食事摂取基準」でコレステロールの基準を撤廃しました。

アメリカでも同様の動きがあります。食品から摂る量を「あえて抑制する必要はない」というのが最新の見解なのです。もうひとつは飽和脂肪酸が含まれていることですが、これも他の食品から不飽和脂肪酸を摂取してバランスをとることで対応できます。



清水 誠 氏
東京農業大学教授
応用生物科学部栄養科学科 教授

農学博士、東京大学名誉教授。牛乳乳製品健康科学会議幹事。1977年東京大学大学院農学系研究科博士課程修了。静岡県立大学助教授、東京大学助教授、東京大学大学院農学生命科学研究科教授などを経て、2014年より現職。



牛乳乳製品健康科学会議
乳の学術連合

3分野の連携で効果的な情報発信を

— 乳の学術連合の活動のあり方について、考えをお聞かせください。

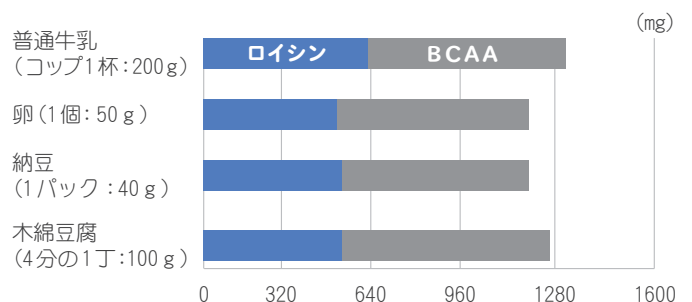
清水：牛乳の脂質の話題もそうですが、メジャーな食品には否定的な言説が必ず出てくるものです。そうしたアンチの動きに対し、国内外の研究から得られた科学的なデータに基づいて正しい情報を発信していくことが、学術連合の大事な役割のひとつだと思います。

しかし、食品の安全性や機能性は自然科学だけでは結論が出せませんし、科学的データをそのまま発信しても、全ての人理解できるわけではありません。私たちの持っている情報を世の中にわかりやすく伝えるためにはコミュニケーションのマネジメントが必要で、ここでは社会科学的な考え方が大切なのです。

例えば冒頭で指摘した若い女性の栄養不足の問題に対しては、低体重児のメタボのリスクの啓発や、子どもと親への栄養教育が必要です。その際、若い女性のダイエット志向や、現代の核家族における食習慣の形成といった社会科学的な視点を取り入れることで、栄養に関する科学的な情報を効果的に伝えることができます。こうした消費者とのコミュニケーションや教育活動に、健康科学・社会文化・食育の3分野が連携して取り組めることが、乳の学術連合の意義だと思います。

「Jミルクでも今後、学術連合3分野のさらなる連携強化を支援しながら、アンチミルクへの対応や乳の価値訴求の充実を図っていきたいと考えています。本日はありがとうございました。」

1食当たりの食物に含まれる必須アミノ酸



酪農乳業の“みらい”を考える視点を提供

～平成 27 年度「酪農乳業みらいセミナー」の講演から～

特集 2

かつてない構造変化に直面する酪農乳業界は、次世代に向けたビジョンを描きながら、TPP への対応、生産基盤強化、アンチミルクなどの諸課題を解決していくことが求められている。そこで Jミルクでは、日本の酪農生産や牛乳乳製品の将来像を考える「酪農乳業みらいセミナー」を全国 4 か所（札幌・東京・神戸・熊本）で開催した。業界関係者らを前に、乳の学術連合の研究者が講演し、酪農乳業の現状理解と今後の方向性を考える上での多様な視点を示した。ここでは、東京・神戸会場での講演をレポートする。



生源寺 真一 氏
名古屋大学大学院 教授
東京・熊本会場 **講演 1**

日本農業の持続可能性と酪農乳業の役割

今年3月に閣議決定した「食料・農業・農村基本計画」では、政策の安定性が中心メッセージになっている。近年は政権交代などもあり、農業政策の安定性を欠いたこ

とが、農家にとって経営のリスク要因になってしまった。

酪農乳業関連の施策は短期間での大きな変化はなかったが、TPP交渉の大筋合意をはじめとする新たな事態を前に、今後の酪農乳業のあり方をしっかりと見据える必要がある。

その際のひとつの視点として、安定感を欠く国際市場との向き合い方がある。市場の不安定さに対して、酪農乳業が自助努力で改善克服できる領域と、できない領域を見極めることが重要で、それが国民から理解される制度政策を生み出す基盤だと考える。

例えば日本の酪農は、農業経済学で言う生物化学的技術 (Biological and chemical technology) と工学的技術 (Mechanical technology) の両面において急速に飼養管理技術が進歩しており、既に生産性は高く、大幅なコストダウンは難しい段階に入っている。こうした酪農家の経営努力についても、消費者や納税者に知ってもらうことが大切である。

国際穀物市場が不安定ながらも高値でバランスするようになっている今、飼料の自給体制の検討が、水田の将来像との関連でも重要になっている。現在は飼料米を含めた主食米以外の作物に補助金が出ているが、これは米の生産調整からの発想だ。日本の農地で中長期的にどんなエサづくりが望ましいかを、酪農の側からも積極的に提起して欲しい。

TPPは今後、国内の酪農生産にさまざまなルートと形態で影響を及ぼすと予想される。特に、チーズやホエイ等の扱いについての乳業メーカーの中長期的な戦略は大きな要因になり得る。その意味でも、乳製品の消費動向と、それを支える供給構造の変化を読み込んでいく必要がある。単身世帯が3分の1を占めるこの国の食生活のあり方と、牛乳乳製品の今後の位置づけを、業界全体で考えることが重要である。

東京会場 2015.10.29(木)
熊本会場 2015.11.27(金)

→ Program

- 1 日本農業の持続可能性と酪農乳業の役割
生源寺 真一 氏 名古屋大学大学院 教授
- 2 ヒトにとって牛乳はどのような食品なのか？
～食品科学からみた牛乳の特別な意義～
齋藤 忠夫 氏 東北大学大学院 教授

神戸会場 2015.11.20(金)
札幌会場 2015.12.18(金)

→ Program

- 1 人類にとってのミルク利用の意義
～その起源と発達～
平田 昌弘 氏 帯広畜産大学 准教授
- 2 日本人の栄養問題
～その歴史の変遷と牛乳乳製品が果たしてきた役割～
中村 丁次 氏 神奈川県立保健福祉大学 学長



齋藤 忠夫 氏
 東北大学大学院 教授
 東京・熊本会場 **講演 2**

ヒトにとって牛乳はどのような食品なのか？ ～食品科学からみた牛乳の特別な意義～

ミルクの意義を考える上で最初に押さえておきたいのは、他の食品との違いである。例えば肉や卵は本来生物として存在するものを人間が食べ物にしているが、赤ちゃんのためにつくられるミルクは、最初から食品として分子設計されている点が根本的に異なる。

牛乳の栄養的特徴として、栄養素密度の高さが挙げられる。牛乳コップ1杯はわずか140kcalだが、カルシウムの1日必要量の3割前後、ビタミンB2の4分の1程度をはじめ、多くの栄養素を摂ることができる。

ミルク固有の成分として、乳糖がある。その働きとしては、ミルクの浸透圧の調整、環境由来の有害微生物の増殖防止、ビフィズス菌を特異的に増やす作用などがある。カルシウムの吸収にも役立っているとされているが、生体内では実証されていない。

牛乳にカルシウムが豊富に含まれることは周知の通りである。栄養学的には、口から入ったカルシウムの量ではなく、吸収され骨の中のコラーゲンに結合する量が重要だが、この点でも牛乳は優れている。調理なしに多くのカルシウムが摂れる上、吸収率も高い食品は他にない。

牛乳のホエイたんぱく質には、必須アミノ酸の1つであるロイシンが豊富に含まれる。ロイシンは筋肉をつく

る遺伝子スイッチをオンにするとされており、近年問題視されている高齢者の筋肉減少症(サルコペニア)対策という点でも重要な栄養素だ。やや負荷のかかるウォーキングをした直後に牛乳を飲むことで、筋肉を確実に増やせることが近年の研究から明らかになっている。

ほ乳動物の中で、大人になってもミルクを飲んでいるのは人間だけである。このことから、大人には unnecessary 食品だとする主張もあるが、決してそんなことはない。むしろ、健康寿命の延伸が課題となる現代において、中高年の生活習慣病対策、高齢者の筋肉減少や骨粗鬆症対策のために牛乳乳製品は不可欠な食品だと言える。



平田 昌弘 氏
 帯広畜産大学 准教授
 神戸・札幌会場 **講演 1**

人類にとってのミルク利用の意義 ～その起源と発達～

人類によるミルクを利用する文化は、最新の研究では紀元前7000年頃に西アジアで始まったとされている。動物を殺して肉を食べるのではなく、家畜として共生することによって、食料生産が大きく変化した。ミルクの生産効率は肉の3.7倍で、栄養価も高い。優れた食品を安定して獲得する手段を得たことで、家畜とミルクに依存する牧畜という生業が成立した。ミルクの利用は人類史の革命的な出来事であり、その成果は乳製品に支えら



酪農乳業みらいセミナー
 東京会場(写真左)、神戸会場(写真上)

れた豊かな現代生活をもたらしている。私たちミルクに携わる者もその意義を再確認したい。

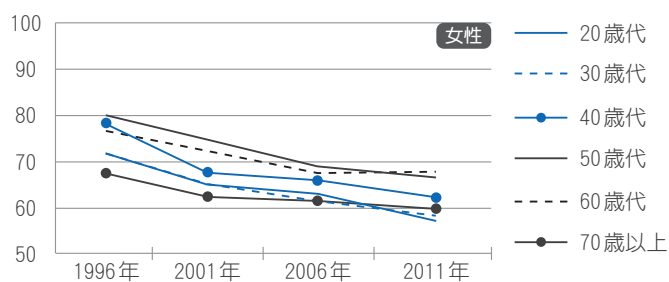
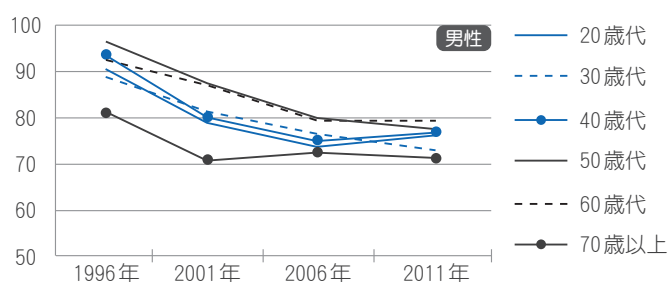
ミルクの利用はやがて、加工技術の確立とともにユーラシア大陸全域に伝播していくが、その波が及ばなかった地域もある。日本もその一つで、ミルクは近代以降に導入され、「嗜好品」「補助栄養食」「西洋型食文化」「米との融合」「発酵食品との融合」の5つの型で浸透してきた。日本人の古くからの食生活という点では、まだ周辺の領域にとどまっているとも言える。

しかし、乳製品の守備範囲の広さと異文化融合に長けた日本の国民性を考えると、わが国における乳利用発展の余地は十分残っており、中心的な食に入ってくる可能性もあると私は考えている。

日本型の乳利用の確立という点では、和食との融合に加え、文化としての格上げも重要だ。ポイントは、生産者と消費者の関係性づくりと、乳製品を取り込んだ豊かな生活提案。ミルクを単に商品として扱うのではなく、文化形成の核にすることで価値を高めることができる。流通業界だけでなく酪農家にも参画してもらい、消費者との関係づくりに力を入れていく必要がある。

地球の「みらい」に目を向けると、人口増大に伴い食料増産の必要性が高まる中、ミルクの生産効率の高さが再評価されつつある。これまで以上にミルクと上手く付き合っていくことが、人類の未来につながるのではないだろうか。

たんぱく質摂取量の推移 (g/日)



※厚生労働省「国民健康・栄養調査」に基づき作成



中村 丁次 氏

神奈川県立保健福祉大学 学長
神戸・札幌会場

講演 2

日本人の栄養問題

～その歴史の変遷と牛乳乳製品が果たしてきた役割～

最近「和食」が注目されているが、江戸期までの日本の庶民の食事は貧しく、国民病と呼ばれた脚気をはじめ、多くの栄養欠乏症を抱えていた。戦後の食料不足でさらに悪化した栄養状態に対して、国は学校給食の実施と栄養教育により改善を図ってきた。そこに最も貢献したのが牛乳乳製品だったことは明らかである。

子どもたちの栄養改善とともに、学校給食の役割は、栄養補給から教材へと変化してきた。現在では、主食とおかず、汁もの、野菜・果物に牛乳が1本付いている食事パターンこそ大切だということが、実際に食べて体験的に学ぶ教育媒体として機能している。

戦後日本の食生活の変化は、食事の欧米化による過剰栄養という新たな問題を生んだ。生活習慣病予防が課題となり、特に近年はメタボ対策に国を挙げて取り組んできた。その結果、日本は肥満の発症率がOECD加盟国中で最低水準、心疾患死亡率も世界最低水準となった。国民全体としては過剰栄養に歯止めがかかり、健康的な食生活を維持できるようになったと言える。

一方で、日本人は新たな栄養問題に直面している。同じ国、同じ家族、あるいは同じ個人に低栄養と過剰栄養が同時に混在し始めたことによる、栄養障害の二重負荷である。

とりわけ高齢者の低栄養が深刻で、2000年以降から女性の高齢者の痩せが増え始め、男性も痩せの割合が減らなくなっている。痩せは、要介護の前段階であるフレイル(衰弱)につながる。お年寄りこそ栄養、特にたんぱく質を十分に摂ることを推奨し、メタボ予防から介護予防へと食生活のギアチェンジを促す必要がある。

牛乳乳製品は、低栄養と過剰栄養の両面に対応できる。良質なたんぱく質やカルシウムなど豊富な栄養を手軽に摂れるだけでなく、血圧上昇の抑制や糖尿病予防にも効果があることがわかってきた。二重負荷への対策の基礎食品として位置づけられるだろう。

「TPP 大筋合意」による酪農乳業対策の考え方

～Jミルク見解～

TPP(環太平洋経済連携協定)の大筋合意による国内への影響について、農林水産省が分析結果を発表した。それによると、「当面、輸入の急増は見込み難いが、ホエイやチーズの関税撤廃により、長期的には、競合する国内産の脱脂粉乳・チーズの価格下落等が生じることにより、加工原料乳の乳価の下落も懸念される」とし、国内酪農については、「規模拡大等による生産コストの削減や品質向上など国産の優位性の確保等の体質強化対策に加え、経営の継続・発展のための環境整備を検討することが必要」と報告している。

TPP 交渉については、生産現場から不安と懸念の声が上がっており、持続可能な酪農の実現に支障が出る可能性もある。国内への影響に対して、酪農乳業はどう対応すべきか、Jミルクとしての所見を前田浩史専務理事が述べた。

TPP 合意では、多くの乳製品で低関税枠が設定されたり、関税の段階的な削減または撤廃が行われる等しており、今後、国内乳製品の需要減少や価格低下などの影響が幅広い分野で起こる恐れがある。また、牛肉の関税についても大幅に削減されることになっており、乳用肥育による国産牛肉は連動して価格が低下していくことが予想される。

さらに現在進められている EU との EPA 交渉は、TPP 合意内容が基本となるため、EU が強い関心を持つ乳製品の場合は、TPP 合意と同等またはそれ以上に国内への影響が及ぶ合意となる恐れもある。

ただ、日本の酪農乳業への実際の影響がどの時期にどのような形で顕在化するのかについて見通しを立てることは、大変難しいと思う。それは二つの背景による。

ひとつは、乳製品の場合は、他の農産物と異なり、成分や物性が異なる多様な製品が製造され、それらが幅広い多様な食品の原料となっており、同じ食品の原料であっても、異なった乳製品を利用したり組み合わせで調整したりすることが可能だからである。例えば、ホエイは脱脂粉乳の代わりになるし、生クリームを凝固剤で固めればチーズと定義されバターの代わりに利用できる。このように乳製品は可逆性や代替性を持つことが他の農産物にない特徴である。実際に FTA で長期の暫定期間を設けた韓国でも、多様な調製品が輸入され当初予想よりも早く国内への影響が現れていると聞く。

いまひとつは、人口増加や食料問題を背景に世界の乳製品需給はひっ迫基調で推移するとともに、国際経済や気候などはますます変動性が強くなり、輸入乳製品の価

格や供給可能量の変動幅が大きくなることが予想される。

すなわち、国際市場での乳製品は大きな変動幅を見せながらも長期的には価格が上昇し、併せて国際市場から十分に調達できる時もあれば全く出来ない時もあるという不安定な状況が続く見通しである。

こうした背景を踏まえると、国際市場からの影響の出方を固定的に捉えて準備を行うのではなく(実はこれが、他の農産物よりも難しいところ)、どのような影響が出るのか不透明で正確に見通すことは困難であることを、今後の産業運営の構造的課題として位置づけ、酪農乳業の弾力的な対応力を強化するような準備を進めることが不可欠であると思う。

そのための基本的論点は、①牛乳乳製品の需給調整のあり方、②国内の酪農と乳業の競争力を強化する方法と取り組み、③国産の生乳及び牛乳乳製品の価値を高め需要を確保するための工夫や対策、④酪農経営における所得確保対策であり、これを政府及び酪農乳業がそれぞれの立場で準備していくことが喫緊の課題ではないだろうか。Jミルクでも関係者と連携して、今後、議論を早期に始める予定である。



「今後の生乳取引のあり方について」の検討と報告

政府・農林水産省において、近年の生乳生産及び取引等を巡る状況変化と諸課題を踏まえ生乳取引のあり方に関する検討が行われ、平成27年10月9日に「今後の生乳取引のあり方について」が取りまとめられ、公表された。この検討の背景としては、平成12年に同様の報告書の取りまとめが行われたが、その後、生産基盤の弱体化等による生乳及び牛乳乳製品の需給状況や消費流通構造が大きく変化しているなど、経営環境が大きく変化していることが挙げられている。

これら様々な変化に対応していくため、生乳取引価格の改定時期の明確化、交渉プロセスの透明化、公正なデータによる交渉での客観性の確保等が論点として取り上げられ、平成27年7月から10月にかけて酪農乳業関係者を委員として議論がなされ、報告書が取りまとめられたところである。

報告書で示された取り組み概要は以下の通りである。

1. 乳価交渉時期の明確化等について

取引交渉の時期については、製品への価格転嫁の期間を考慮し、毎年度12月末までに価格改定等を決着させることを基本とし、需給や生産コストの動向等に大きな変化があった場合には、価格転嫁のための期間を踏まえつつ契約期間中においても必要に応じた改定を行うこと。

2. 統計データの定期的な情報提供について

国の牛乳生産費統計調査報告は平成27年度から全国、北海道と併せて都府県についても年内に公表することが示された。また、取引に活用するためのデータは、輸入乾牧草の動向等を含め定期的に整理し、Jミルクを通じて提供することや、必要に応じJミルクで酪農乳業関係者の認識の共有化を図ること。

3. 乳価交渉の生産者への説明プロセスの明確化等について

指定団体においては生産者の乳価交渉への参画を進めるため、生乳販売委員会の委員の概ね半数を生産者にすることや、生産者の意向を適切に把握すること、また、交渉の経過報告などに関し丁寧な説明対応が必要なこと。

4. 生乳の有利販売の拡大について

近年、消費者のニーズが多様化する中で、生乳のプレミアム取引については、今後の生乳及び牛乳乳製品の需要基盤強化や有利販売の推進という点で大きな可能性があることから、酪農乳業ではプレミアム取引を活用しつつ、多様な「特色ある牛乳乳製品」の製造販売を進める

ように努めること、併せて生乳の「量」の確保といった視点でも有利販売につながる可能性も考えられるため、こうした新たな取引要素についても検討を進めること。

5. 入札取引の導入に向けた具体的検討について

現行の生乳取引は、生乳の特性などの制約により需給調整面や価格安定の観点から相対取引が行われているが、一方で、近年の生乳生産基盤の問題や乳製品需給上の課題を踏まえると取引の中に客観性を持たせる工夫も必要であるとの問題意識が出された。

これを踏まえ、今後の生乳取引は、生乳の特性や諸外国での取引実態などからも相対取引が基本となると評価しつつも、相対取引上の課題を補正する工夫が必要であるとの考えから、需給動向など市場のメッセージがより直接的に反映され、客観性の一層の確保が可能と考えられる入札取引の導入について検討が行われた。

検討の結果、入札取引により酪農乳業への影響や、牛乳乳製品の安定供給への影響などについても慎重に検証をする必要があることから、試行的に、平成28年度から2年間実施し、仕組みや効果について検証することが示された。

以上の内容が、「今後の生乳取引のあり方について」の概要であるが、これらの取り組みの各事項については実際の取り組みの中で、更なる検討が必要とされており、このための検証作業が併せて行われることとなっている。

「第3回牛乳ヒーロー & ヒロインコンクール」 表彰式を開催

～ 10,529 作品から入賞作品を選考～

特集3

Jミルクは農林水産省などの後援のもと、「第3回牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール」を実施した。牛乳をモチーフにしたオリジナルのヒーロー・ヒロインを子どもたちに表現してもらったもので、今年度は全国から10,529作品が寄せられた。12月13日に都内で表彰式が開かれ、最優秀賞を含む各賞37作品と団体賞5校が表彰された。

子どもたちの多様な発想が作品に

本コンクールも3回目を迎えて学校現場などの取り組みが定着し、応募総数は昨年を上回る10,529作品(団体：561校、個人：216人)にのぼった。10月の審査会では、キャラクターの発想力と表現の工夫、アピール度などを基準に選考が行われ、農林水産大臣賞(最優秀賞)の牛乳ヒーローに「牛乳丸(うしちちまる)」(榊井樂くん・大阪府貝塚市立木島小学校6年)、牛乳ヒロインには「ミルクひめの“ミルちゃん”」(廣岡愛音さん・滋賀県甲賀市立貴生川小学校1年)が選ばれた。

審査員の奥村高明氏(聖徳大学児童学部長 教授)は表

彰式で、「『ミルクひめの“ミルちゃん”』は牛乳瓶のドレスを着て、右手でコップを差し出してミルクを配っています。人と人をつなぐ牛乳の力、コミュニケーションを感じました」とコメント。「牛乳丸」は、「6年生らしく複数の要素を日本的に表した作品。世界に誇る高品質の国産牛乳とともに、このヒーローが世界中で活躍してくれそう」と述べた。また、全国から多様な作品が寄せられた本コンクールを振り返り、「子どもたちの思考の深さと広がりを感じた」と総評した。

なお今回の最優秀作品は、平成28年度の「牛乳の日・牛乳月間」、「食育月間」の啓発資料などのキャラクターに活用される予定。



表彰式の様子

受賞作品一覧

牛乳ヒーロー



農林水産大臣賞

牛乳丸(うしちまる)

大阪府貝塚市立木島小学校
6年 榎井 楽くん

作品コメント

頭から牛乳を出して配り丈夫な骨作りをみんなにさせる。骨の丈夫さは弁けいの泣き所で調べる。持っている骨笛と骨刀はカルシウムのおかげで最高の音色と切れ味である。牛乳パックで作ったエコセンスでエコを広める。

牛乳ヒロイン



農林水産大臣賞

ミルクひめの“ミルちゃん”

滋賀県甲賀市立貴生川小学校
1年 廣岡 愛音さん

作品コメント

ミルクひめだからミルクのびんのドレスにして、かんむりにうしさんをつけました。ぎゅうにゅうがだいすきで、みんなにおいしいぎゅうにゅうをくばってくれるよ。



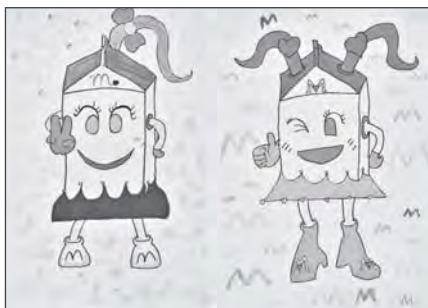
独立行政法人
農畜産業振興機構理事長賞
ミルクメモリーズ
広島県 相原 潤くん



受賞者の集合記念写真



酪農家特別賞
ミルキー
福島県 西牧 里紗さん



公益社団法人 全国学校栄養士協議会会長賞
ミルミン/ミルキー
長野県 山崎 瑠花さん、山崎 凜さん



牛乳工場特別賞
ミルクッキン
岡山県 山上 奈々羽さん



牛乳販売店特別賞
みるく侍 乳左右衛門と乳之助
岡山県 川村 爽太くん

■団体賞

静岡県浜松市立北浜南小学校、大阪府豊中市立上野小学校、広島県呉市立広小学校、千葉県千葉市立幸町第三小学校、茨城県日立市立田尻小学校（団体賞は応募数が上位の団体に贈られました）

国際的な動向から日本の次世代酪農の姿を探る

～「酪農乳業の国際比較研究会」で研究者と酪農家が意見交換～

Jミルクでは3年前から、各国の酪農乳業に関するデータの収集と分析を行う国際研究組織「IFCN」(International Farm Comparison Network)との連携を開始し、情報提供や国際会議への研究者派遣などを行っている。11月5日には、今年の活動報告を踏まえて、国際的な視点で我が国の酪農乳業の現状と今後を考える「酪農乳業の国際比較研究会」を開催。東京大学大学院准教授の細野ひろみ氏による報告、名古屋大学大学院教授の生源寺眞一氏の問題提起に続いて、研究者と酪農家によるディスカッションを行った。

「酪農乳業の国際比較 ～ IFCNの報告から～」

細野 ひろみ氏 (東京大学大学院 農学生命科学研究科 准教授)

IFCNは1997年に設立された酪農乳業の研究者と事業者の国際ネットワークで、各国の酪農関連事業者などおよそ100組織、90か国ほどの研究者が会員として参加している。会員から収集した酪農乳業に関するデータを分析し、2000年から毎年「IFCN Dairy Report」として公表している。

2015年には、57か国66地域の173農場の詳細な経営情報と、100か国の生産量や乳価に関するデータが集まった。日本から提出する情報は、平均的な経営規模として都府県を、大規模経営では北海道の統計データを採用している。ここでは、日本の酪農経営を他国と比較してみたい。

まず目を引くのが、日本の酪農の生産コストの高さだ。今回は円安の影響で3位だったが、世界的にも高コストの部類に入る。内訳を見ると、日本は飼料代が他国と比べて非常に高く、牛の取引価格でも未經産牛と雄子牛の価格が高いことがわかる。

また、独・仏・加・米の80頭規模と都府県・北海道の経営を比較すると、本州の労働費が突出して高い。1時間当たりの賃金はそれほど高くないため、労働生産性は低くなる。日本の酪農家は長時間働き、丁寧に牛を見ていると捉えられるし、労働を効率化する余地が大きいと見ることもできるだろう。他に機械、診療費が高いこともうかがえる。

IFCNでは今年から、収集したデータを基にした世界の酪農乳業の長期見通し(2025年までの10年間)を発表している。それによると、世界全体の酪農家戸数は今後10年で平均1.6%ずつ減少し、1戸当たりの飼養頭数は年平均2.7%増加するとしている。地域別の生産量では、世界のほぼ全域で増加が予想されているが、日本と韓国では減少が見込まれている。一方で、世界人口と1人当たりの乳消費量は増加を続けるため、2025年にはアジア(特

に中国、インド)やアフリカを中心に、生乳の不足量が大きくなると考えられている。

2014年には、EUの酪農政策変更などに伴って生産量が増大したこともあり、国際的に乳価が大幅に下落した。これを受け今年夏以降、欧米や中国の酪農経営が急速に悪化している。日本は比較的安定した状況だが、これは日本の乳価が国際価格の影響をあまり受けていないためだ。乳価の国際価格が国内乳価や酪農経営に影響を与えるまでには、国ごとに異なる要因が関連し、時間差もある。今後の動向を注視する必要があるだろう。

「国際情勢と日本の次世代酪農」

生源寺 眞一氏 (名古屋大学大学院 生命農学研究科 教授)

前半の報告で示された国際的な現状と日本の実態をつなぎながら、この後のディスカッションに向けた論点整理を行いたい。

世界的な乳製品需要の高まりと国際市場の変化に対応するため、各国・地域がさまざまな取り組みを行っている。EUでは、1984年から実施してきた生乳クォータ制度を今年3月に廃止した。加盟国の酪農乳業事情は異なるため、各国の実態に合った形での制度廃止への準備が、この数年進められてきた。事前に法律改正を行うとともに、生乳取引契約関係の改善、取引交渉力強化に向けた生産者の組織化といった酪農部門の強化策を導入している。このように、綿密な準備や手当を行いながら思い切った改革を実行する取り組みは、日本にも学ばべき点が多いと考える。

世界の穀物市場が高値で需給がバランスする状態に移行したことで、日本の酪農にとっては飼料の確保が重要課題になっている。水田の将来像を描くことが求められる中、飼料の国内生産の可能性も検討すべきだろう。政府は飼料米の生産に助成措置を講じてきたが、主食用の米

の需給事情優先の思考も見受けられる。いま必要なのは、「穀物ユーザー」としての酪農・畜産の側から、適切な作物からなる飼料生産の全体像を提案することではないか。

また一般の国民の多くが、農業と言えば「稲作」「高齢化」といったイメージを抱いているが、酪農の実態は異なることも指摘しておきたい。日本の酪農経営は多様化しており、若者や働き盛りの酪農家も多く、乳製品の加工・販売に力を入れるタイプ、自然との調和や牧場の教育力を重視するタイプなども見られる。近年はメガファームの成長も顕著だ。私は、こうした酪農経営の現状や可能性を、国民に広く知ってもらうことも大切だと考えている。

こうした内容を踏まえた上で、ディスカッションの論点として次の3点を提案したい。

- 1 深まる国際化のもとで日本の酪農生産が生き抜くために必要なこと。
- 2 若者や働き盛りの世代にとってやりがいのある次世代酪農のビジョンを考える。
- 3 次世代酪農を力強く支えるため、酪農をめぐる制度や政策には何が必要か。

「次世代酪農の可能性についてフードチェーンの全体から考える」～パネルディスカッション～

パネリスト

鶴川 洋樹氏(秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科 教授)

松下 克己氏(松下牧場 役員)

廣野 豊氏(有限会社広野牧場 代表取締役)

論点1

地域の実態に合った連携で、飼料・機械コストの削減へ

鶴川：輸入飼料を使った生産を続ける限り、日本の酪農のコストの高さは残る。国内産飼料への置き換えが必要になる。都府県でも、栃木県や熊本県といった飼料生産基盤がある地域は生産が伸びている。

廣野：平成8年に地元の飼料会社とエコフィードを共同開発し、現在は全量それを使っている。酪農経営にも、自社の強みを伸ばし、それ以外の部分は外注するという考え方が必要だ。

松下：機械コストへの対応も課題。私の地域では、従来の利用組合に代わってコントラクター化する動きがある。地域の実態に合った連携が大切だと思う。

論点2

酪農のやりがいと魅力を、牧場から発信することが大切

廣野：私の牧場ではジェラートショップを併設し、酪農教育ファーム活動も行っている。酪農の良さや魅力を伝

えることで、牧場が人と情報の集まる場所になり、若い人が酪農に関心を持ってくれるという点でも大きく寄与していると感じている。

松下：酪農教育ファームの活動を通じて、酪農家からの情報発信の重要性に加え、仲間を増やすことの大切さも実感している。次世代の酪農には、「群れ」で生きていくという発想が必要だと思う。

論点3

長期的ビジョンに基づく政策と、地域特性に適した支援を

鶴川：減反廃止に関連した収入保険のような制度が議論されているが、酪農にもそうした仕組みが必要になるだろう。そのためには国民的な理解が重要。農家の経営努力に対するインセンティブが内包された制度設計が求められるし、酪農への消費者理解を深める取り組みに対する支援もあっていいと思う。

松下：酪農のあり方は地域によって違う。ばらまきではなく、地域の実態に適した支援策を求めたい。次世代という観点では、経営継承ができる体制づくりも考えていく必要がある。

廣野：政策のプレは酪農家に大きな影響を与えるので、長いスパンで施策を打ち出してほしい。私たちも変わっていかねばならない。ブランディングの発想や、リスクに対処できる体制づくりが必要。また、小規模での経営ノウハウを蓄積し、新規参入する若者に提供することも求められると思っている。

細野：アメリカやEUの農業政策は、目指すべき姿を提示し、それに対して中期・長期に何をするかという戦略で決められていく。費用対効果の分析結果も政策内容と一緒に提示する。国民の理解を得るという点ではこうした取り組みも必要だろう。

生源寺：政策の安定性は重要な課題。先が読めない状況は酪農家の経営判断を難しくする。制度・政策のプレやTPP交渉を巡る情報などが、農家にとってリスク要因として作用し続けた近年の日本。国際的な動向を踏まえ、短期的な変動要因への対処も織り込みながら、次世代酪農への展望を描き出すことが、いま求められている。



右からモデレーター：生源寺 眞一氏、
パネリスト：鶴川 洋樹氏、細野 ひろみ氏、松下 克己氏、廣野 豊氏

酪農乳業食育推進研修会

～知識の提供から、感覚・感動の教育へ 体験を通じて食の価値を見直す『味わい教育』の可能性～

Jミルク主催の酪農乳業食育推進研修会が9月29日に都内で開催された。酪農乳業関係者が実施している食育活動を、教育現場のニーズなどを踏まえて検証し、改善を図るもので、今年度は学習院女子大学の品川明氏が「牛乳を活用した『味わい教育』のすすめ」をテーマに講演、ワークショップを行った。

知識の提供より、五感や心を刺激する体験を

「現在の日本の教育現場は教育者が知識を提供し、生徒に納得してもらおう活動が多く、生徒自身が体験する機会は少ない。重要なのは実際に体験して知識を形成することであり、そこで初めて自らの知識・ポキャブラリーになる」と品川氏は語る。

特に食の教育は、五感を通じた体験により、感性や能力を積極的に引き出すことが必要となってくる。そこで品川氏は『味わい教育』を提言している。

『味わい教育』とは、栄養・健康面の知識形成に加え、自然観や感性も育てる人間教育で、心を育み人間力を復活させるものとする。五感や心で食を味わうことにより、普段は見過ごされがちな食のありがたみを再確認し、その背景や本質を理解することを目指す。知識の提供ではなく、学習者自身の感覚や感動を通じた知識の形成を重視している点が特徴だ。

また、この教育の根幹には郷土の食がある。利便性の追求により食の画一化が進むなか、つながりや情景を想像しやすい郷土料理や行事食は、食の価値や本質を見直す題材になる。

さらに品川氏は「『味わい教育』で大切なのは、少数意見を重視すること。議論やコミュニケーションを通じて味わいを共有する過程で、子どもたちからは様々な疑問



講演風景



参加者の意見も共有



ワークショップで牛乳の飲み比べを体験する参加者

や考え方、感覚が出てくる。そこに正解を求めず、価値観を押し付けることなく、各自の意見を尊重する姿勢が指導者に求められる」と説いた。

乳の多様性を楽しむことも大切

研修会では『味わい教育』を体験するために、アーモンドと乳製品の食べ比べ・飲み比べを行い、味覚の違いを議論する場が設けられた。

品川氏は「牛乳は多様性に富んだ食品。草の匂いがするものなど、違う味や香りを楽しめる商品があってもいいと思う。また、人が生まれてから初めて口にするのは母乳であり、乳はほ乳類にとって神秘的で価値のある食べ物として存在している。自分たちが飲んできた多様な『乳』について、子どもたちとコミュニケーションする活動も大切ではないか」と提案した。



品川 明 氏
(学習院女子大学 教授)

東京水産大学卒業。東京大学大学院農学系研究科水産学専攻修了。農学博士。味覚に与える食生活の影響、二枚貝の成分含量と生態系との関わりを専門とし、問いかけベースで体験型の科学・環境教育を行う。

海外の酪農の実情を現地で体感

～第40回酪農海外現地実務研修会に参加～

(一社)中央酪農会議が主催する「第40回酪農海外現地実務研修会」が10月28日～11月7日に実施された。Jミルク・マーケティンググループからラフォリ裕子が参加し、ドイツとデンマークの2カ国を訪問した。現地での研修内容をまとめたレポートを掲載する。

(一社)中央酪農会議主催の「第40回酪農海外現地実務研修会」に参加する機会をいただき、ドイツ・デンマークの2カ国を訪問した。北海道湧別町農業組合の友澤組合長を団長に総勢14名の研修団で、10月末すでに冬の気候のヨーロッパへ向かった。

研修の主なテーマは①EU生乳クォータ制度(生乳生産枠割当制度・1984年導入)の今春の廃止の影響について、②今後日本でも導入が進む搾乳ロボットを所有する酪農家の実態を学ぶことであった。

①については両国とも最近の乳価の下落はクォータ制度廃止によるものではなく、ロシアのEU農畜産物禁輸措置及び中国の乳製品需要低下によるものが大きい。クォータ制度廃止を歓迎する酪農乳業関係者が多いという話だった。

②2カ国で4か所の酪農家を訪問したが、搾乳ロボットの導入は、飼育頭数の増加、人件費削減や時間に余裕ができるといったメリットをもたらしているようだ。しかし、機器の導入費用やランニングコストなどの負担は大きい。さらに最近の乳価下落による収入減で生活は決して楽ではないが、それよりも家族と過ごす時間を増やすことを大切にしている、どの酪農家の表情にも暗さはなく、むしろしっかり将来を見て進んでいるように感じた。

ドイツ到着翌日の朝、「ノルトライン＝ヴェストファーレン州酪農業連盟」という、州の生産者・乳業者が会員となっている機関を訪問した。ここは日本というJミルクのような組織ということもあり、(一社)中央酪農会議の報告書で私が担当する訪問先となった。ノルトライン＝ヴェストファーレン州はデュッセルドルフを州都とし、オランダ・ベルギーに隣接する。多くの大企業の拠点があり、ドイツ16州の中で人口が最も多く、GDPの1/4を占める経済州である。

連盟の担当者からは業務内容について丁寧な説明を受けた。スタッフ数は12名と小規模ながら、消費者向けだけでなくJミルクというインフルエンサー向け、生産者・乳業者への法的なコンサルタント業務など幅広い事業をこなしている。また、地域に50名の女性の協力者(栄養士5名、他は酪農家の妻)がいて、イベントなどの活動を一緒に行っているという。

ドイツでも日本同様若者の牛乳離れが進んでいるようだ。多くの学校で給食がないため家庭での摂取が重要になると思われる。

この後、行政機関、酪農支援組織、酪農家等を訪れたが、どこへ行ってもきめ細かい対応と研修団の質問に対する丁寧な説明をしていただき、真面目で温かい両国の国民性を窺い知ることができた。

今回の研修会は、私自身は初めて顔を合わせる方々との11日間となった。普段は現場に触れることのない職場にいて、日本と比較する知識もない中での参加となったが、現地で見えて聞くことに加え、研修団の皆さまから教わる日本の現状など、全てのことに発見がある貴重な経験となった。

訪問国：ドイツ、デンマーク

期間：平成27年10月28日～11月7日



コペンハーゲン街中のビルに「1/2Lのミルク、毎日、一生」の広告

栄養指導実践セミナーを開催 ～地域の実情に即したテーマで指導法を学ぶ～

Jミルクは栄養士向け「栄養指導実践セミナー」を全国5か所(宮崎、京都、和歌山、鹿児島、岡山)で開催した。管理栄養士・栄養士の栄養指導実践力やコミュニケーション力の向上を目的に、生活習慣病予防、健康寿命の延伸、メタボ対策など、開催地域の実情に即したテーマを選定。専門家による講演とワークショップで理解を深めた。

「健康日本21(第二次)」が掲げている通り、国民の健康寿命の延伸のために、疾病予防と健康増進、介護予防などが今後さらに重要となり、専門職としての管理栄養士・栄養士の活動への期待が高まっている。

一方で、マスメディアが発信する多様な健康情報など



栄養指導実践セミナー
宮崎会場写真

の影響もあって、健康を意識する人が増えている反面、誤った情報や部分的な知識によって、食事や栄養の偏り、食生活の乱れが目立つ人も増加し、その結果、肥満や過度の痩身、生活習慣病の増加などが課題となっている。

こうした状況に対応するため、本セミナーでは、地域の食生活の現状や行政の取り組み状況などを踏まえ、開催地栄養士会が注力したい課題を講演テーマに選定。生活者の課題に対応した栄養指導のポイントと、指導時の適切なコミュニケーションのあり方を、具体的な活動事例などを通して学んだ。

また、実際の栄養指導場面を想定したワークショップも実施。参加者のコミュニケーション上の課題克服や、栄養指導ツール「ライフステージ別食の課題とアドバイス」を活用した栄養指導などをグループで話し合った。

超高齢化社会に向けての食事と運動法 ～40代からのカラダの守り方～

10月25日、帝京平成大学中野キャンパスにて第14回“更年期と加齢のヘルスケア学会”学術集会が開催された。Jミルクが協力した併催の区民公開講座では、健康寿命の延伸につながる食事法やヘルスケアなどの生活習慣改善をテーマに、3名の専門家が講演した。

太田博明氏(国際医療福祉大学 教授)は40代からの生活習慣改善の必要性を解説した。「40代の多くの人は、加齢による病気にかかったことはないが、今後病気になる可能性のある“未病”の状態。まだ健康を取り戻せる段階なので、正しい知識に基づいて早期の予防が大切」と指摘した。

藤原恵子氏(緑風荘病院 管理栄養士)は食事による生活習慣病予防について講演した。「仕事や育児に多忙な40代は、栄養が偏りがち。乳製品や大豆製品の積極的な摂取が、減塩、過栄養の予防、骨粗鬆症予防につながる。和食に牛乳を取り入れる乳和食は食生活改善に有効で、調理も簡単なので実践してほしい」と提案した。

大友博之氏(渋谷セントラルクリニック 総院長)は、効果的な運動のポイントを解説した。「運動は有酸素運動、筋力トレーニング、バランストレーニング、柔軟トレーニングに分類される。まずは自身に不足している運動を把握することが大切。40代からの体づくりでは、やみくもに運動するのではなく、運動の種類や時間を考慮し、食事による適切な栄養摂取と合わせて継続的に行うことが重要」と説いた。



3名の専門家による講演会

乳和食で健康な生活を

～小山浩子氏が国会議員の会議にて講演～

公明党「食育・食の安全推進委員会 農林水産部会 合同会議」(11月20日)において、国民の健康増進のために乳和食が果たす役割を話し合った。小山浩子氏(料理家・管理栄養士)の講演に続き、乳和食を試食。学校給食や減塩食としての普及に向けた取り組みなどを意見交換した。

講演の中で小山氏は、「和食の弱点は塩分が多いこと。日本人の塩分の過剰摂取は全世代にわたって大変深刻な問題。食育の観点から、子どもから高齢者まで、“減塩”を意識した食の自立の支援が今後大切」と指摘した上で、「乳和食」は、牛乳を活かした新しい和食。単に牛乳を飲みましょう、和食に牛乳を入れましょうではなく、減塩こそが目的。なおかつカルシウムを始め、たんぱく質、ビタミンなどのバランスが整えられる、と解説した。

講演後に出席者は、小山氏監修の乳和食弁当を試食した。「牛乳が入っている感覚がないので、牛乳の苦手な人でもおいしく食べられると思う」「減塩食と聞くと味気ないものをイメージするが、乳和食は味がしっかりついていて、おいしい。牛乳の活躍は目から鱗だった」などの感想が出ていた。

出席者からは、「高齢者の低栄養や若者の栄養不足などの問題に、我々も以前から取り組んできた。こうした課題の解決に向けて、乳和食にはとても興味を持っている。これから力を合わせて取り組んでいけたらいいと思う」と乳和食の普及に前向きな見解を述べた。



牛乳食育研修会を開催

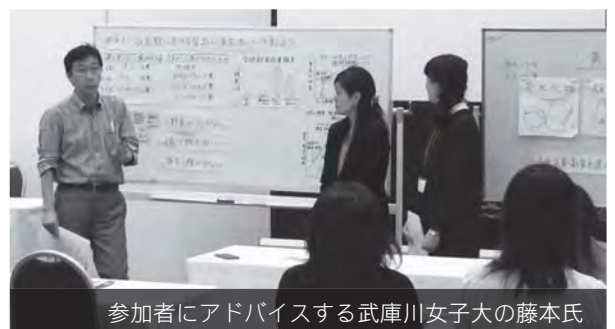
～学校教職員対象に食育研修会を全国5会場で実施～

Jミルクでは、10月15日～12月4日に全国5会場(弘前、新潟、京都、山口、長崎)で牛乳食育研修会(協力/公益社団法人全国学校栄養士協議会)を開催した。小・中学校の栄養教諭や学校栄養職員、養護教諭、一般教諭らに牛乳を活用した食育活動のポイントを考えてもらうためのもので、5会場合わせて36都道府県124人の教職員が参加した。

研修会は2日間の日程で行われた。1日目は、酪農家と乳業メーカー担当者が、牛乳生産と工場での処理段階での取り組みを説明。次に開催地域の教職員が、教材「伸びる食育・牛乳編」(Jミルク発行)を使った模擬授業形式での研究発表を行った。

さらに石井雅幸・大妻女子大学准教授(弘前、京都、山口会場)、藤本勇二・武庫川女子大学専任講師(新潟、長崎会場)が、食育の授業実践理論についての講演を行った。

1日目後半から2日目には、ワークショップ形式で牛乳を活用した食育の授業プランづくりに取り組んだ。全国学校栄養士協議会の先生にも協力をいただき、実践の流れや教材活用のポイントなどを話し合い、各グループの成果を模擬授業で発表した。参加者へのアンケートでは実践的な研修内容への評価が高く、教材の貸し出しや他の教職員への説明資料の要望に加え、酪農家や乳業メーカーと連携した授業実施に関する相談も寄せられている。



Jミルクの活動日誌

平成 27 年 9 月 1 日から 11 月 31 日に実施した主な委員会及びイベント

9 SEPTEMBER

- 3 乳の社会文化ネットワーク幹事会
- 8 第 1 回生産流通専門部会
- 11 第 2 回マーケティング委員会
- 13 牛乳食育研究会・幹事会
- 14 牛乳乳製品健康科学会議・幹事会
- 15 第 40 回メディアミルクセミナー
- 17 第 1 回マーケティング専門部会
- 24 第 3 回需給委員会
- 25 第 3 回理事会
- 29 27 年度 酪農乳業食育推進研修会

10 OCTOBER

- 1 乳の社会文化情報収集委員会
- 2 第 1 回ポジティブリスト委員会
- 4 乳和食研修会(岡山)
- 15 牛乳食育研修会 16 日まで(青森)
- 16 第 1 回臨時総会(みなし決議)
- 22 牛乳食育研修会 23 日まで(新潟)
- 24 栄養指導実践セミナー(宮崎)
- 26 第 3 回ライフステージ別
栄養指導研究会
- 29 酪農乳業みらいセミナー(東京)

11 NOVEMBER

- 5 IFCN「酪農乳業の国際比較」研究会
- 12 牛乳食育研修会 13 日まで(京都)
- 15 栄養指導実践セミナー(京都)
- 18 乳和食研修会(高知)
- 19 牛乳食育研修会 20 日まで(長崎)
- 20 国会議員向け 乳和食昼食会
- 20 酪農乳業みらいセミナー(神戸)
- 27 酪農乳業みらいセミナー(熊本)

第 14 回全日本ホルスタイン共進会が開催

ホルスタイン種および、ジャージー種の改良方針に沿って改良が進められている全国の種牛を集め、その水準を広く示すことで乳牛の資質向上や、酪農の発展を目的とした第 14 回全日本ホルスタイン共進会が 2015 年 10 月 23 日～ 26 日、北海道にて開催された。



経産 6 歳以上の部では 14 歳の乳牛も登場



乳牛も酪農家にとっても晴れ舞台



会場は超満員

今後のスケジュール 平成 28 年 1 月 1 日から 3 月 31 日までの会議・行事の開催予定を掲載いたします。

| 日程 | イベント | 会場 | 内容 |
|------|----------------------|----------------|--|
| 1. 8 | 乳の学術連合運営委員会 | Jミルク会議室 | 28年度の活動方針及び事業計画についての検討 |
| 1. 9 | 栄養指導実践セミナー(岡山会場) | 岡山衛生会館 | 「健康寿命の延伸と牛乳・乳製品」(講師:宮本拓氏) 「メタボリックシンドローム改善のための栄養指導の実践」(講師:林進氏) |
| 1.13 | 第5回需給委員会 | Jミルク会議室 | 28年度需給見通しについて |
| 1.18 | 健康科学会議スポーツ分科会 | Jミルク会議室 | 28年度「牛乳乳製品健康科学」学術研究一次選考 |
| 1.20 | 第2回生産流通専門部会 | Jミルク会議室 | 28年度需給見通し等、28年度生産流通事業計画の基本的な考え方について |
| 1.21 | 第41回メディアミルクセミナー | 大手町 サンケイプラザ | 仮題「世界の栄養状態の進むべき方向性」(講師:中村丁次氏) |
| 1.22 | 第4回理事会 | Jミルク会議室 | 28年度需給見通しと課題及び28年度事業計画の基本的な考え方等 |
| 1.26 | 健康科学会議ライフステージ分科会 | Jミルク会議室 | 28年度「牛乳乳製品健康科学」学術研究一次選考 |
| 1.27 | 酪農乳業危機管理対策連絡会 | Jミルク会議室 | 自給粗飼料放射性物質、検査支援の取組経過、現場からの現状報告 |
| 1.28 | 「乳の社会文化」学術研究審査委員会 | Jミルク会議室 | 28年度「乳の社会文化」学術研究公募申請の審査及び採択者の決定 |
| 1.29 | 第4回マーケティング委員会 | Jミルク会議室 | 28年度マーケティング活動、事業計画の協議 |
| 1.29 | 健康科学会議リラックス安眠分科会 | Jミルク会議室 | 28年度「牛乳乳製品健康科学」学術研究一次選考 |
| 1.31 | 「食と教育」学術研究審査委員会 | Jミルク会議室 | 28年度「食と教育」学術研究公募申請の審査及び採択者の決定 |
| 2. 4 | 第2回マーケティング専門部会 | Jミルク会議室 | 28年度マーケティング事業計画の審議 |
| 2. 4 | 健康科学会議 免疫分科会 | Jミルク会議室 | 28年度「牛乳乳製品健康科学」学術研究一次選考 |
| 2.18 | 第5回理事会 | Jミルク会議室 | 臨時総会の招集、28年度事業計画・収支予算等 |
| 2.29 | 第4回ライフステージ別栄養指導研究会 | Jミルク会議室 | 「ライフステージ別食の課題とアドバイス」を活用した指導モデルの開発等 |
| 2.29 | 健康科学会議学術研究選考委員会(幹事会) | Jミルク会議室 | 28年度「牛乳乳製品健康科学」学術研究公募申請の審査及び採択者の決定 |
| 3. 3 | 第2回臨時総会 | KKRホテル東京 | 28年度事業計画及び収支予算、28年度会費及び拠出金の額並びに納入方法等 |
| 3.20 | 牛乳食育研究会幹事会 | Jミルク会議室 | 28年度の事業計画及び運営体制についての検討 |

スタッフ紹介コーナー

「Jミルクで働くスタッフを紹介します。」
今回は生産流通グループです。



生産流通グループ
(左から星野、大野、佐藤、下村)

佐藤 ■ グループ統括、課題検討、学乳関連
「最近、本当に何が起ころのか分からないと思っていますが、変化こそチャンスだという心構えで仕事をしたいと思っています。」

大野 ■ 生乳検査精度管理、災害等危機管理
「生乳検査精度管理でお悩みの方には認証取得をお勧め致します。ご相談ください。」

下村 ■ 需給関連、ポジティブリスト対応
「グローバル化の大波が押し寄せていますが、国際競争に打ち勝ちましょう。」

星野 ■ データベース管理、グループ内庶務
「HP内『酪農乳業情報』データの更新を担当しています。何かありましたらいつでもご連絡下さい。」

訃報

乳の学術連合・乳の社会文化ネットワークの会員で、IFCNやIDF、GDPの活動推進に積極的に関与し大きく貢献された、細野ひろみ先生(東京大学大学院 准教授)が、滞在中の米国シカゴで、交通事故に遭遇され、11月21日亡くなられました。

心よりご冥福を祈り、謹んで関係者の皆様にご報告申し上げます。



編集後記

酪農乳業界は大きく分けると生・処・販。それぞれに団体や組合が存在しているけど、その中でJミルクってどんなことをやっている組織なの? 特に業界外の方々には判りにくいみたいで、そういう方と面談する際は、Jミルクの立ち位置を説明するところから入ることが多いです。この辺り、部内の方にも周知が不十分だと感じていて、その強化にむけて取り組んでいるところです。牛乳の価値・効用を世の中に広く伝えていくことは、Jミルクに課せられた重要な業務の一つですが、現在Jミルクの方針としては消費者一般の方々を対象にした普及活動はやっていません。医者、栄養士、教員の方々など、牛乳・乳製品に深い理解のある方々を、私たちはミルクインフルエンサーと呼んでいますが、そうした方々への働きかけを通じて、最終的に一般消費者の皆様にも広がっていく、そうした戦略を採っています。活動日誌のページをご覧いただきたいのですが、秋から1月にかけて、こうした目的に基づくセミナーや研修会を多数開催しています。皆様のご理解・ご協力に感謝します。(K、H)

ポジティブリスト制度に対応した生乳の定期的検査を実施

酪農乳業界では、食品中に残留する農薬等に関するポジティブリスト制度に対応した「酪農乳業一体的な取組み」として、①生産現場での農薬等の適正使用と記帳・保管、②第三者による指導・検証、③これらを実証する生乳中の農薬等の残留検査実施による品質管理システムを構築して、安全の確保に努めています。

この品質管理システムに基づいて、Jミルクでは、農薬等使用実態調査(中央酪農会議実施)を基に管理対象物質を選定し、生乳中における管理対象物質の残留検査(年1回の定期的検査)を実施しています。

平成27年10～11月に平成27年度定期的検査を実施しましたので、ご報告いたします。なお、詳細はJミルクホームページをご覧ください。

<http://www.j-milk.jp/>

平成27年度生乳の定期的検査の結果

| | 管理対象物質数 | | 検体数 | 検査結果 |
|--------------------|---------|-----|-----|----------|
| | 北海道 | 都府県 | | |
| 農薬 | 7 | 8 | 100 | すべて基準値以下 |
| 動物用医薬品 | 8 | 8 | 104 | すべて基準値以下 |
| 洗剤・殺菌消毒薬・殺虫剤・駆虫剤など | 6 | 8 | 96 | すべて基準値以下 |
| 計 | 21 | 24 | 300 | — |

注) 検査機関：一般財団法人日本食品分析センター

第10回「学校給食甲子園」開催

牛乳・乳製品部門賞を秋田県上小阿仁村学校給食調理場、愛知県西尾市立平坂中学校が受賞

地場産物を使用した学校給食のおいしさや栄養価を競う第10回「全国学校給食甲子園－地場産物を活かした我が校の自慢料理－」の決勝大会が、12月6日に女子栄養大学(東京)で開催された。

学校給食で提供されている郷土料理を競うことにより、食育の啓発、地産地消の奨励、地域の活性化などを目的とするもので、今大会は全国から2,054件の応募があった。

決勝大会には、1～4次予選を勝ち上がった12校・施設の代表が出場。応募献立の調理過程を審査委員がチェックし、食味審査で味や見た目を評価した。その結果、優勝に群馬県みなかみ町月夜野学校給食センター、準優勝に秋田県上小阿仁村学校給食調理場が選ばれた。

Jミルクでは本大会に後援として参加。牛乳・乳製品部門賞に秋田県上小阿仁村学校給食調理場、愛知県西尾市立平坂中学校が選ばれた。この賞は、文部科学省の学校給食実施基準にあるように、カルシウム摂取に効果的である牛乳・乳製品を積極的に活用し、地場産物や郷土に伝わる料理に取り入れた献立の中から審査で決定されるものである。



上小阿仁村学校給食調理場の学校給食



平坂中学校の学校給食



右から上小阿仁村の細田栄養教諭、平坂中の谷栄養教諭、前田専務理事

j-milkレポート vol.19 発行日/2016年1月

編集・発行/  一般社団法人 Jミルク

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階 TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>  <https://www.facebook.com/jmilkjp>